

河村顯勝寺とあるから、當時は今河と稱したのであらうとする説もあるが、矢張り今江村の親書と思はれる。郷村各義抄に、この村は往古の南新保村・玉院村・あと村・東新保村・稗村・おとし村が集つたもので、木場湯から江を掘つた爲に今江の村名を得たとあるが、庶傳であらう。明暦二年前田利常は、邑民多くして田地少きを以て、その二十人を越中新川郡舟見野に分ち、之をも今江村と稱せしめたことがある。又寶永誌には、この村の領畠の内に御坊屋敷といふがあり、それを長善寺の址と傳へると記する。

イマエカスガジンジャ 今江春日神社 ↓ オウゴノミヤジンジャ 擁護宮神社。

イマエガタ 今江潟 能美・江沼二郡の境にある。一名琴湖。長さ二〇七三米、幅一三〇九米、周囲八軒、面積三〇八ヘクタール。寶曆十四年の調書に、今江潟東西十三町南北十九町、湯回り南より西に懸け大聖寺藩領串村・日末村領があるが、湯は一林に加賀藩領で、伊勢鯉・鯉・鯉・鯉・鳥類を捕り、鰻・真菰が生ずるとある。

イマエジマ 今江瀧 能美郡今江で製した木綿織物である。天保年間初めて草綿を耕種し、高機を用ひて白木綿を製したに起り、安政初年から紺無地又は縞物を出すに至つた。

イマエジヨウ 今江城 能美郡今江に在つて、今江城とも御幸塚城ともいふた。この地は今江潟に臨む低丘であつて、今江の部落はその北に接してゐる。御幸塚といふは郭内に存する一古墳の名稱であるが、地方人は花山法皇行幸の遺址だと附會して居る。本城は初め富樫泰高の據つた所であるが、長享二年富

樫政親の滅亡以後泰高が野々市に移つたため、一向一揆の據る所となつた。天正四年その徒内田四郎左衛門・林七介等こゝを出て大聖寺城の戸次廣正を攻め、次いで佐久間盛政・徳山則秀は來りてこの城を陥れ、五年十月織田信長は、盛政に命じて之に居らしめた。八年柴田勝家御幸塚に陣し、且つ徳山則秀の父少左衛門を置いた。後慶長五年前田利長の大聖寺から三堂山に兵を退けんとした時、亦小松勢を牽制するが爲、山崎長徳・奥村榮明・太田長知等をしてこゝに假成せしめたことがある。

イマエダウチシモヤシキ 今枝氏下邸 今枝氏家臣の邸地で、藩政中は今枝の家中和稱した。今長土塀一番丁となつてゐる。

イマエダウチテイ 今枝氏邸 金澤高岡町に在つた。この邸地は、元祖内記重直の、慶長中高岡附の諸士と共に搬宅した時に賜はつたもので、明治廢藩の際に及ぶまでそこに居た。

イマエダケイフ 今枝系譜 一冊。加賀藩今枝氏の系譜で、その跋に維時延寶四年丙辰九月十七日今枝内記豐臣直方謹記焉とある。

イマエダシゲナホ 今枝重直 初諱定直。通稱彌八郎。内記。重直の父八郎左衛門は美濃の人、内藤伊賀守に仕へて六千石を領し、又齋藤道三に仕へて軍功があつた。元龜元年六月重直姊川の戦に稱葉伊豫守に歸し、崩際に首級を獲た。時に年十七。二年五月信長の伊勢長島を討つた時には伊賀伊賀守に歸し、次いで織田信雄に仕へ、小牧山の戦に合戦し、後豐臣秀吉に轉じ、天正十九年秀次に

謀し、遂に文祿二年尾州の五千三百石を領知

し、三年從五位下内記に拜任した。秀次の横死するに及び、重直は一時牢浪したが、四年九月前田利長の招に應じて守山に下り、堪忍料三千石から漸く登りて五千五百石となり、次いで利常に歸して大坂兩役に従ひ、元和五年六十六歳を以て致仕して宗二と稱した。この時五千石を養子直恒に譲り、五百石を隱居料とし、寛永四年十二月廿三日七十四歳を以て歿した。子孫世々藩に仕へる。因に言ふ。重直の諱は金澤古蹟志・加賀藩史に據る。諸士系譜・絶家録には之を直重に作つてゐる。

イマエダチカヨシ 今枝近義 初諱直治、後直賢・直友。小字阿萬、後彌平次。民部。民部直恒の第三子。祖重直の歿後其の隱居料五百石を賜はり、翌年前田利常の子小將となつた。時に年十五。寛永十五年山林の事を掌り、十九年宗門奉行となつて、吉利支丹宗徒を鞠治した。慶安四年父の歿後一萬二千五百石を襲ぎ、次いで家老となり、前田綱紀の傳に任せられ、寛文二年二月祿千五百石を増せられた。次いで九年家老を辭し、延寶三年二月退老して信齋と號し、其の祿三千石を隱居料とした。近義人と爲り温良、典故に諳練し、理財に長じ、又讀書を嗜み、好んで通鑑綱目を讀み、源氏物語の講説を侍能順に聽いた。七年十二月廿九日病んで別墅虛直亭に歿した。年六十六。

イマエダツネアキ 今枝恒明 通稱主水。初名新之助。八郎左衛門。岡山藩日置彌八郎忠明の季子で、今枝民部直方の養嗣となり、正徳四年金澤に來着した。享保八年十一月前田吉徳に江戸に召されて新知千石を賜はり、九年八月若年寄を命ぜられた。然るに父子相

協はざるを以て十三年六月二日職を免ぜられ、七月二日直方の上書によつて秩祿を放たれ、その下邸に盤居し、直方から五百石を私給せられた。時に年廿九。直方の主張する所は恒明が義父に對して不孝であるのみならず、忠諫の臣を退け、女色に耽るといふにあつた。恒明寶曆二年四月三日を以て病歿した。

イマエダナホカタ 今枝直方 初め八右衛門。内記といひ、後に民部と稱した。備前岡山侯の老臣日置猪右衛門忠治の五男。承應二年を以て生まれ、寛文七年今枝民部近義の養子となり、延寶三年近義の退老によりて一萬千石を受け、七年その歿後本祿一萬四千石に復し、享保五年家老に任せられ、世子の傳を兼ねた。直方の養子右近は早逝した爲、亦日置彌八郎の四男主水恒明を養子としたが、後故あつて廢嫡し、更に前田修理の二子内記直道に家を襲がしめ、享保十三年十一月歿した。享年七十六。直方一名は橋、字は懸遊、榮木の號があり、著す所左記の如くに多い。

甲子開書 辰巳役志
列國雜々のさた 壬申雜篇
重輯雜談 己卯雜誌
續己卯雜誌 朝聘使志
當國雜志 元祿九種府談
當時禁廷諸事合志 江戸沙汰集書
見聞雜志 温故雜錄
江府京駿雜志 甲申雜書
丙戌隨筆 辛卯隨筆
壬辰雜志 正徳御代易略志
癸巳雜志 越年使役日記
甲午雜筆 丙申集書
享保革命略志 享保戊戌集書

三年從五位下内記に拜任した。秀次の横死するに及び、重直は一時牢浪したが、四年九月前田利長の招に應じて守山に下り、堪忍料三千石から漸く登りて五千五百石となり、次いで利常に歸して大坂兩役に従ひ、元和五年六十六歳を以て致仕して宗二と稱した。この時五千石を養子直恒に譲り、五百石を隱居料とし、寛永四年十二月廿三日七十四歳を以て歿した。子孫世々藩に仕へる。因に言ふ。重直の諱は金澤古蹟志・加賀藩史に據る。諸士系譜・絶家録には之を直重に作つてゐる。